

『落窪物語』の命令・勧誘表現

川上徳明

はじめに

『落窪物語』を「大衆小説」と断じたのは小島政二郎の『わが古典鑑賞^{*1}』であった。そして小島のこの直感を研究的に実証したのは、三谷邦明である。三谷は『落窪物語』を「大衆小説、より厳密に言うなら、下級女房を享受者とする物語と位置づけ」、更に、下層女房であるあこき及びその夫の帯刀が、「他の物語とは比較にならないほどの活躍をしているところ」からこの夫妻を物語の副主人公とみるのである^{*2}。

また『落窪物語』は会話量が多く、総行数の四二％に及ぶことが報告されているが、その豊富な会話文によって「登場人物の個性的な人間像を描き出」し、「まさに大衆向けの文体を発見した」とされる^{*4}。

ここでは『落窪物語』における命令・勧誘表現を考察しようとするのであるが、自ら同時に、「命令・勧誘表現から見た『落窪物語』」ということになろうかと思う。なお、「命令・勧誘表現」の意味は広義に用い、いわゆる

命令・勧誘の他に、依頼・懇請・強制・懲憑等の用法を含める。これについて筆者は既に繰り返し規定している*₅で、詳細は省略に従う*₆。また、用例採否の基準についても、別稿において詳説したので、それに譲ることとする*₆。なお、以下、話し手、聞き手という語を、それぞれ命令者としての話し手、受命者としての聞き手の意で用いる。テキストは新日本古典文学大系『落窪物語』（底本は九条本家『をちくほ』）である。

一の1 命令・勧誘表現の四段型体系

『落窪物語』の命令・勧誘表現を考察するに当たって、先ず前提として、中古の仮名文学作品（和文）一般における命令・勧誘表現の基本的な有り様を確認しておく。それは次のような形式によってなされる。

- | | | | | |
|---|---------|-------------|-----------|--------------|
| ① | ……** | (これあけよ) | ……給へ | (用意し給へ) |
| ② | ……む | (もろともに見む) | ……給はむ | (早、出立ち給はむ) |
| ③ | ……むや | (今少し光見せむや) | ……給はむや | (見奉り給はむや) |
| ④ | ……やは……ぬ | (重き祿やは賜はらぬ) | ……やは……給はぬ | (ここにやは宿り給はぬ) |

これは

- ① 命令形による直接的な命令表現
- ② 推量形式による婉曲な命令・勧誘表現
- ③ 推量―疑問（問い）の形式による、一層婉曲な命令・勧誘表現
- ④ 反語……否定の形式による、最も婉曲間接的な命令・勧誘表現

である。この形式は常体、敬体の差に関わりなく見られるのであり、更に、文末に完了の助動詞「ぬ」「つ」が下接する場合もこれに準ずるのであって、これを補足しながら、用例の大部分を占める主要な形式を帰納、整理したのが次の第1表である。

第1表

機能	命令	婉曲な命令・勧誘		
形式	①命令形	②推量	③推量―疑問	④反語…否定
動詞系	………**	………む	………むや	やは………ぬ
「ぬ」系	………ね	………なむ	………なむや	/
「つ」系	………てよ	………てむ	………てむや	/
「給ふ」系	………給へ	………給はむ	………給はむや	やは………給はぬ
「給ひぬ」系	………給ひね	………給ひなむ	………給ひなむや	/
「給ひつ」系	………給ひてよ	………給ひてむ	………給ひてむや	/

(注)

- 1 「………**」の部分、例えば「言へ」「行け」「おはしませ」等、動詞の命令形が入る。
- 2 斜線部は用例を欠く。これは「なぬ」「てぬ」(完了の助動詞+否定の助動詞)の連接が和歌にごく少数見られるだけであるから、この欄の用例がないのはむしろ当然である。(「おはします」を例にすれば、①「おはしましね」②「おはしましなむ」③「おはしましなむや」という例はあるが、「やは……おはしましなぬ」という例は無いのである)。

この表は一つの整然たる体系を成している。従ってそれは、一定の原理によって統一的に説明し得るものである。その原理は、①「命令形」、②「推量」、③「推量―疑問(問い)」、④「反語……否定」という文末形式にある。右を

「命令・勧誘表現の四段型体系」

と称し、また各形式を上から順に、それぞれ

①型 ②型 ③型 ④型

と称する。各型の表現価値は、①型が、直接的な命令表現であり、以下順をおって、婉曲、間接の度が強まる。従って、命令―相手への働きかけの強さは、婉曲、間接の度が強まるにつれて弱くなる。

以上が中古の主要な仮名文学作品（和文）における命令・勧誘表現の体系である。これは作品数二〇余、用例数約三〇〇〇例から帰納したものである。^{*7}

右の表に入っていないのは、おおよそ次の諸形式である。

1 「こそ……め」「こそ……給はめ」の形式、即ち右の②型が係結をとったもの。②型。

例 「夜一夜こそなほのたまはめ」（枕草子）。「とくこそ心みさせ給はめ」（源氏）。

2 推量の助動詞「……べし」によるもの。この形式は中古の仮名文学作品（和文）にはごく少数しか見られぬものである。②型。

例 「しろすめすべし」（落窪）。

3 推量の助動詞＋断定の助動詞「……（給ふ）べきなり」によるもの。これは命令形ではないが、「べきなり」で命令・勧誘の意を表すものとする。この形式も中古の仮名文学作品（和文）にはごく少数しか見られぬものである。①型。

例 「御車ながら明かせ給ふべきなり」（落窪）。

4 尊敬・受身の助動詞「る・らる」の命令形によるもの。①型。

例 「これはいつよりもよく縫はれよ」(落窪)。「御覽ぜられよ」(源氏)。

5 使役の助動詞「す・さす」の命令形によるもの。①型。

例 「かれに手洗はせよ」(落窪)。「格子あげさせよ」(落窪)。

6 完了の助動詞「たり」の命令形によるもの。①型。

例 「しばしゐたれ」(落窪)。「仰せおきたれ」(源氏)。

一の2

命令・勧誘表現研究においては、待遇表現特に敬語の問題と関連させつつ考察することが重要である。従って、次に「敬度」「敬度値」「敬度指数」について述べる。ただし、この問題については既に別稿において詳述したので、ここでは簡単に要点のみ記す*。

先ず、「敬度」について述べる。待遇表現特に敬語による登場人物に対する言語的な待遇の高低、敬意の度合を「敬度」と称し、会話文中の命令・勧誘表現における聞き手(受命者)に対する言語的な待遇の高低を「A・B・C・D・N」の五段階とする。A・B・C・D・Nに相当する語句を次に掲げる。

A これはいわゆる二重敬語及び最高敬語に相当する。

……せ給ふ……させ給ふ・おはします・きこしめす・御覽ず・たてまつる(着る・乗る)・給はす・のたまはす・まゐる(食ふ・飲む)等

の諸語である。

B これはいわゆる「敬体」であって「……給ふ」及び他の尊敬語の段階に属するものである。

……給ふ・遊ばす・おはす・おぼす（おほし……）・おもほす・御殿籠る・給ふ・遣はす・のたまふ等の諸語である。なお、助動詞「る」「らる」もここに含める。

C これはいわゆる「常体」であり、「行け」「言へ」の類である。常体表現の語一般について説明する必要はないであろう。ここでは特に謙讓語の扱いについて述べる。

謙讓語は、敬意の受手が話し手（命令者）自身でない場合は問題としない。換言すれば、受手が第三者の場合、その表現（受手尊敬）は話し手（命令者）と聞き手（受命者）との関係には一往関わりないものとする。従って

「（我に）申せ」 「（我に）奉れ」

等は次のDの「尊大体」とするが、

「（彼に）申せ」 「（彼に）奉れ」

等は「常体」扱いとする。

D これは謙讓語による聞き手（受命者）即ち第二人称卑下であり、「受手尊敬」の敬意が話し手（命令者）自身に向かうものである。いわゆる「尊大体」。

「（我に）申せ」 「（我が言を）承れ」

「（我に）奉れ」 「（我に）参らせよ」

の類である。

N これは「謙讓語十尊敬語」の形で、謙讓語による「受手尊敬」の敬意は話し手自身に向かい、尊敬語「給ふ」の敬意は聞き手に向かうものである。『落窪物語』にはこの例はない。

次は、「敬度値」について述べる。「敬度値」とは前述の敬度を数値化したものである。数値化することによって、敬意の度合の、相対的な高低の指標たらしめようとするのである。具体的には、敬度Aをプラス3、同Bをプラス1、同Cをマイナス1、同Dをマイナス3とする。

次にある作品、ある類型、ある登場人物等における敬度値の平均を「敬度指数」と称する。敬度指数は敬度値の和を用例数で割って算出する。敬度指数の最高値はプラス三、〇〇、最低値はマイナス三、〇〇である。例えば、『源氏物語』で惟光から源氏に対する五例はすべて敬度Aであって、敬度指数はプラス三、〇〇、『落窪物語』で男君からあこきに対する一三例はすべて敬度Cであって、敬度指数はマイナス一、〇〇、同じく女君から御たち（三条邸の女房・少納言等）に対するものではB、Cが各三例であって、相殺されて敬度指数は〇、〇〇となる。

命令・勧誘表現における敬意の高低の差、敬意の度合の差を客観的、数量的に把握し、各類型等の微細な差をも識別するために「敬度指数」という指標を設定するのである。

以下、「命令・勧誘表現の四段型体系」に基づき、敬語に留意しつつ考察を進める。

な 命 令 ・ 勧 誘																					
量							③ 推量—疑問						④反語…否定								
6	7	8	9	10	11	12	13	1	2	3	4	5	6	1	2	小	合				
給ひなむ	給ひてむ	こそ…… (給は)め	こそ…… (給ひ)なめ	こそ…… (給ひ)てめ	(給ふ)べし	なむ・ぞ…… (給ふ)べき	こそ…… (給ふ)べけれ	小	むや	なむや	てむや	給はむや	給ひなむや	給ひてむや	小	やは…… ……ぬ	やは…… ……給はぬ	小	計	計	計
0	1	4	0	0	1	0	0	18	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	312		

先ず『落窪物語』の命令・勧誘表現の全用例の一覧表(第2表)を掲げる。これは前述の四段型体系を基礎に、更に具体的な表現形式ごとに細分したものである。なお、この表は中古の主要な仮名文学作品に見られる命令・勧誘表現の諸形式を網羅、整理することによって作成したものであるから、『落窪物語』のみならず、各作品に適用できるものである。(共通の一覧表を用いることによって、各作品の比較が容易に出来る)。本表で、例えば「①命令形」の「3・10・11」の項あるいは「④反語……否定」の「1・2」の項など、用例を欠くものがあるのはそのためである。

表を概観する。総用例数は三二二である。先に『落窪物語』には会話量が多いことに触れたが、命令・勧誘表現の用例も多い。『源氏物語』の命令・勧誘表現の総数が約六四〇例であるから、おおよそその半数に近い。作品の量からい

第2表

命 令																婉 曲									
① 命 令 形																② 推									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16										
													助詞下接 (内数)			小 計					(いざい)				
動詞・補助動詞 命令形	せよ・させよ	しめよ	れよ・られよ	ね	てよ	たれ	給へ	給ひね	給ひてよ	給ひたれ	給へれ	(給ふ) べきなり	かし	よ	や	む	なむ	てむ	たらむ	給はむ					
119	9	0	3	4	6	2	129	11	0	0	8	1	11	2	0	292	3	6	1	1	1				

注 () で包んだ語は、それが無いことがある意。

うと『落窪物語』は『源氏物語』の約九分の一に過ぎないから、その命令・勧誘表現の比率の甚だ高いことを知る。多くの命令・勧誘の会話文によって事態が進行、展開していることを窺わせるのである。

次に四段型体系の面から見る。①型が二九二例で全体の九三、六%を占める。『源氏物語』『夜の寝覚』『蜻蛉日記』その他計一五作品の用例一五〇〇余について見るに、①型の用例は九〇%弱である。『落窪物語』で①型の比率が高いということは、この作品には命令形による直接的な命令・勧誘表現が多いということの意味する。④型は他の作品に於てもごく少数なのであるが、『落窪物語』には皆無である。「反語……否定」の形式による、最も婉曲間接的な④型の例がみられず、また、「推量―疑問(問い)」の形式によって相手の意向を尋ねる③型の例も少ない。これはストレートな形式である①型の比率の高さと表裏の関係にあらう。

第三に、①型の「1」(これは動詞のほか補助動詞「たてまつれ」二例を含む)と、同じく①型の「8」「給へ」

の二形式で、総用例の七九%を占める。因みに『源氏物語』の場合は七九%、『夜の寢覚』の場合は八一%である。これらの作品のように用例数の多いものでは、この二形式でほぼ八〇%前後の数値を示すことになる。しかも、これらを含め中古の仮名文学作品（和文）計一五の平均は七九%である。従って命令・勧誘表現の大部分は、動詞命令形と補助動詞「給ふ」の命令形によってなされると言ってもよい。しかも（ここでは詳説を省くが）平均して言えば、「8」の「給へ」の方が、「1」の動詞（ごく少数の補助動詞を含む）を上回っていることも指摘しておく。

次に①型の完了の助動詞による用例について触れる。①型の「5・6・7・9・12」で計三一例であって、総用例の九、九%に相当する。因みに『源氏物語』の場合は「5・6・7・9・10」で六、七%であり、それに比して『落窪物語』は高率である。用例数五〇以上の作品で九%以上のものは、他に『夜の寢覚』の九、一%（一四三例中の一三例）があるに過ぎない。

「完了の助動詞は、単に事件の完了を客観的に述べるだけでなく、表現に主観的な感情の色づけを加えるもので」^{*10}陳述を確かめる意を表すものであるが、特に「つ」「ぬ」の命令形は、命令法として、話し手の意図を相手にもちかけ、ひたすらその実現を要求する、とりわけ主体的な情意の色合いの濃いものである。従って『落窪物語』の命令・勧誘表現は相手に対する働き掛けの強いものが多いということになる。具体的な検討は後に行う。

三の1

次に敬度指数をみることにする。

第3表によって型別の敬度指数を見ると、ここでは①型より②型、②型より③型の敬度指数が低くなっている。

第3表 型別の敬度指数

型/敬度	A	B	C	D	計	敬度指数	%
①	26	168	96	2	292	+0.49	93.60%
②	2	7	9	0	18	+0.22	5.76%
③	0	1	1	0	2	0.00	0.64%
④	0	0	0	0	0	(なし)	0.00%
計	28	176	106	2	312	+0.47	100%
%	9.0	56.4	34.0	0.6			

第4表 性別の敬度指数

	話し手→聞き手	A	B	C	D	計	敬度指数	
イ	男→男	13	24	47	2	86	+0.12	+0.31
							+0.48	
ハ	女→男	6	40	7	0	53	+0.96	+0.81
							+0.55	
ニ	女→女	6	40	21	0	67		
	計	28	174	105	2	309	+0.48	

注1 神仏に対する1例(巻四、237頁。B)、両親に対する1例(巻二、144頁。B)及び聞き手の性別不明(不特定の家人)の1例(巻四、257頁。C)の計3例を除く。

2 巻四、250頁の「おぼせ」の聞き手「北の方の子たち」は男とする。

(1) この理由は次の理由による。
 ①型は②型、③型に比べBの比率の高さによって相対的に敬度指数が高い。

(2) ②型は自らを含む勧誘の例が多く(八例、この場合は尊敬語表現を取らない)、また父中納言の女君(おちくぼの君)に対する言(一例、巻二)等、C待遇の例の比率が高いことにより敬度を下げている。

(3) ③型は次の二例だけである。B・Cの各一例で、相殺されて敬度指数は〇、〇〇である。

「おはしなむや」(男君↓女君、B。巻一、六五頁)。

「伝へてむや」(弁の少将↓少納言(北の方の侍女)C。巻一、七五頁)。

『落窪物語』の全体の敬度指数は、プラス〇、四七である。これが高いか、低いかは単独では言えぬことであるから、他の作品と比較すれば、『夜の寝覚』が、プラス一、二一、『源氏物語』がプラス〇、七八である。これらが高またはそれに次ぐものもある。敬度指数の差は、三作品の、登場人物の階層の相違ということであろうが、ここでは詳説の紙幅がない。なお、先に、中古の一五、六の作品の敬度指数を示してあるので、詳しくはそれによって比較して戴きたい。^{*11}

三の2

次に性別の敬度指数をみる。

第4表により、(1)女の言葉の敬度指数が高いことが知られよう。女が話し手の「ハ」「ニ」の平均はプラス〇、八一であり、男が話し手の「イ」「ロ」の平均はプラス〇、三二であって、その差は歴然としてゐる。(2)「ハ」の(女↓男)のそれが著しく、突出している。逆に「イ」の(男↓男)の場合は甚だ敬度指数が低くなっている。更に(3)「ロ」の(男↓女)と「ニ」の(女↓女)を比較すれば、「ニ」の方が敬度指数が高いことを見る。因

第5表 主な話し手の敬度指数

話し手	A	B	C	D	計	敬度指数・その順位	
						敬度指数	順位
男 君	6	51	51	0	108	+0.17	8
女 君	2	18	9	0	29	+0.52	4
中納言	1	12	9	0	22	+0.27	7
北の方	0	26	11	0	37	+0.41	5
帯 刀	3	8	3	0	14	+1.00	2
あこき	7	18	3	0	28	+1.29	1
右大臣	2	2	5	0	9	+0.33	6
道頼母	0	6	1	0	7	+0.71	3
計	21	141	92	0	254	+0.44	

注 人物の呼称はそれぞれ一つをもって代表させた。

みにこの(3)の傾向は『源氏物語』では一層著しい。これまでも性別による敬意の度合の差(筆者のいう敬度指数)について一部言及したものはあるが、このように多数の用例に基づく数値によって、初めて明確な判定が出来るよう。^{*12}

四の1

第5表には用例数の多い話し手の敬度指数、その高低の順位を示したものである。男君(道頼)の用例数の多さが目立つが、これは当然であろう。この男君を別格として、次が中納言の北の方であり、女君、あこきと続く。あこきの用例数が女君と変わらないのが注目される。男君からあこきまでの上位六名の合計は二三八例で、全用例の4分の3に及ぶ。

敬度指数の最も高いのはあこき、次いで帯刀である。このふたりの敬度指数は断然他を引き離している。あこきの場合には二八例中、敬度Cが三例あるが、これは夫である帯刀に対するもの(二例)と、あこきの召使いの女童「つゆ」に対するもの(一例)で、それ以外はすべて敬度A、Bの高い待遇をしている。これは相手(受命者)が道頼、女君、越前守、三郎君といった主筋の者及び典薬助を中心とするからである。

次に帯刀の一四例についてみる。敬度Aの三例はすべて道頼に対するものである。次に敬度Bの八例中、二例は帯刀の母に対するものであるが、残る六例は妻のあこきに対するものである。次に敬度Cの三例中、一例はあこきに対するものであるが、これは「寝なん」（巻一）と言っている例で、自らを含む勧誘であるから無敬語の表現になっているのである。これを別にとすると、右に見たように帯刀はあこきに対してすべて敬度Bをもって対している。因みに、あこきは帯刀に対して、敬度Bが一例、同Cが二例（既述）である。これによってみれば、あこきの方が出自が上なのであろうと思う。^{*13} 残る敬度Cの二例は、あこきの召使の女童「つゆ」にたいするものと、少将の車副に対するものである。

第三位の道頼母の敬度指数はプラス〇、七一で比較的高いが、これは相手が道頼、右大臣（夫）、女君で高い待遇を要することによる。

以上、話し手としての敬度の高い三者について簡単に触れた。

四の 2

次の第6表には同じく用例数の多い聞き手の敬度指数、その高低の順位を示したものである。最多は女君である。この女君に対する五七例^{*14}について見るに、話し手で最も多いのは男君の三三例であり、ついで北の方の七例、あこきの六例と続く。第二位はあこきの三三例であり、話し手の場合と同様最も注目すべき数値である。内訳は男君からの一三例、帯刀からの七例、女君からの六例が主なものである。

聞き手として最も高い待遇を受けているのは、中納言であり、その敬度指数プラス二、一一は真に突出している。

第6表 主な聞き手の敬度指数

聞き手	A	B	C	D	計	敬度指数・その順位	
						敬度指数	順位
男 君	9	14	4	* 2	29	+1.07	2
女 君	6	46	5	0	57	+1.04	3
中納言	5	4	0	0	9	+2.11	1
北の方	2	22	5	0	29	+0.79	7
帯 刀	0	2	22	* 2	26	-1.00	11
あこき	0	9	24	0	33	-0.46	10
越前守	1	13	7	0	21	+0.43	9
四の君	0	19	1	0	20	+0.90	5
少 将	0	10	1	0	11	+0.82	6
典薬助	0	11	0	0	11	+1.00	4
兵部少	0	7	1	0	8	+0.75	8
計	23	157	70	* 4	254	+0.60	

- 注1 人物の呼称はそれぞれ一つをもって代表させた。
 2 *印の2例は双方にあげてある。従ってDの実数は2、計の実数は252である。計の敬度指数は実数を基に算出してある。
 3 この表で敬度指数が最も高いのは、中納言の+2.11であるが、登場人物全員では、帝の+2.33 (A=2、B=1) である。
 4 「女君」に対する巻一の66頁の例は採らない。

いま分かり易く言えば、敬度指数がプラス二、〇〇ということは、敬度AとBの用例が各五〇%ということである。中納言の敬度指数は、それを上回っている。第二位の男君の敬度指数に比較すれば、いかに高い敬度指数であるかが理解されよう。用例数も九と特に少ない訳ではない。巻ごとに見れば、巻一では敬度指数プラス一、〇〇（敬度

B三例、話し手北の方)、巻三で同プラス二、五〇(A三例、B一例、話し手男君)巻四で同じくプラス三、〇〇(A二例、話し手女君)である。

敬度指数プラス一、〇〇以上は典薬助までの四名であるが、プラス一、〇〇以上ということは平均、敬度B以上の待遇を意味する。

最下位は帯刀のマイナス一、〇〇である。用例数二六と多いにも関わらず、このように低いのは、相手(命令者)が主人の男君の例が二〇例と多く(C一九例、B一例)それに帯刀の母の一例(C)、あこきの三例(B一例、C二例)と続くからである。なお、男君からのBの一例があるが、これは男君が正体を隠すための言い方で、これについては後で具体的にみる。

敬度指数がマイナスなのは他にあこきがあるだけである。あこきに対する話し手(命令者)は男君が最も多く、次いで女君、帯刀、北の方であるが、帯刀を除く三者は敬度Cの表現をしており、これが敬度指数を下けている。

四の3

第7表は、先の第5表と第6表から抄出、作成した六名の敬度指数の表である。各人につき話し手の場合、聞き手の場合の二つの敬度指数(①②)を対比する形で示し、聞き手としての敬度指数の高い順に並べてある。また、ここでは「地の文における敬度」も示した。これは話し手、聞き手それぞれの、地の文における言語的な待遇の高低の意である。これを(a)(b)(c)の三段階とする。(a)(b)(c)の敬度はそれぞれ会話文中の敬度ABCにはほぼ等しい^{*15}。この六名の場合、(a)待遇の人物はいない。なお、中納言から北の方までのように、(b)(c)が併記されている人物は、場

第7表 主要人物の両敬度指数の対比

人物	地の文における敬度	話手=命令者として		敬度指数①②の比較	聞き手=受命者として	
		用例数	敬度指数①		用例数	敬度指数②
中納言	ⓑⓒ	22	+0.27	<	9	+2.11
男 君	ⓑⓒ	108	+0.17	<	29	+1.07
女 君	ⓑⓒ	29	+0.52	<	57	+1.04
北の方	ⓑⓒ	37	+0.41	<	29	+0.79
あこき	ⓒ	28	+1.29	>	33	-0.46
帯 刀	ⓒ	14	+1.00	>	26	-1.00

面によりⓑまたはⓒの二段階の待遇がなされていることを示す。この表からどのようなことが知られるであろうか。表は敬度指数①②を比較してその大小を不等号で表しているが、中納言から中納言の北の方までの上位四人とあこき、帯刀の不等号の向きは反対になっている。これは端的に作中人物の身分関係を象徴するものと言つてよい。なぜなら、

(1) 聞き手として高く待遇される人物は、話し手としては相手に対して逆に相対的に低い言語的待遇をもって対し得るからである。主従関係などはその典型である。言うまでもなくここでは不等号の向きは (<) となる。

(2) あこき、帯刀の場合はそれとは正に対蹠的な位置にある。即ち主筋の相手に対して二人とも高い言語的待遇をもってし、逆に自らは甚だ低く遇せられている。帯刀の例では敬度指数①と②はプラス一、〇〇とマイナス一、〇〇であつて鮮やかな対照を示し、端的にその立場が表れているのである。

(3) 地の文における敬度の相違は、右(1)、(2)の事実と対応、相即の関係にある。これは地の文における敬度①②③に所属する人物の段階は、結果的には身分的な序列による段階づけとはほぼ対応していることによる。

四の 4

先の第5第6の両表を併せて、用例数の多い六名は男君・女君、中納言・北の方、帯刀・あこきであり、三組の夫婦ということになる。いまこの六名について話し手(命令者)聞き手(受命者)としての用例を合計すると次頁、第八表その1のようになる。

前述したように、この六名が話し手の場合が全体の4分の3に及ぶ。また聞き手としての用例も一八三例であつて、約六〇%である。話し手・聞き手としての合計四二二例は全用例の六七%を越え、三分の二強になる。単純に割り切つて言えば、この六名が命令し、命令されることによつて物語の事態が進行、展開していることになる。

さて、この六名をその関係によつて配置するとその2のようになる。中心に(1)男君夫妻、左右に(2)中納言夫妻、(3)帯刀夫妻を配する。(1)の計は二三三例、(2)の計は九七例、(3)の計は一〇一である。巻一から巻四まで常に物語の中心にある(1)が最多であるのは当然であろう。(2)と(3)とは僅かながら(3)が(2)を上回っている。「はじめに」で触れたように、下層女房であるあこき、その夫の帯刀の活躍ぶりを物語るものである。更に(2)(3)ではそれぞれ妻の用例数が夫のそれを遥かに上回っている。両者の、物語中の存在の大きさが窺われるのである。特に下層女房のあこきの例が六一に及ぶが、これは物語全用例の約一〇%に近い。まさに驚くべき数値である。あこきが話し手の用例数は二八例であつたが、女君に対するものが六例と最も多く、次いで典薬助に対する四例がある。女君の危急を救つ

第8表

その1

	命令	受命	計
男 君	108+	29=	137
女 君	29+	57=	86
中納言	22+	9 =	31
北の方	37+	29=	66
帯 刀	14+	26=	40
あこき	28+	33=	61
			238+183=421

その2

(2)		(1)		(3)	
北の方	中納言	女 君	男 君	あこき	帯 刀
66	31	86	137	61	40
∨		∨		∨	
97		223		101	

た、あこきの活躍を示す部分である（具体的には後述）。

「『落窪物語』の前半部の本当の主人公は、落窪の君でもなく道頼でもなく、このあこきであるといってもさしつかえないだろう^{*16}」といわれるが、あこきの六一例を巻別にみると巻一が三一例、巻二が一八例、巻三が一二例である。特に前半に集中している。この数値は右の見解を裏付けるものと言ってよからうと思う。『落窪物語』は確かに、あこき及びその夫の帯刀といった下層階級の者が活躍する、中古の物語としては稀有な作品であった。

五の1

これまでは全体的、数量的に考察してきたが、以下、特定の人物、注意すべき表現等について具体的に考察する。

『落窪物語』の登場人物中、命令・勧誘表現に最も多く関わるのは男君であり、既に見たように一三七例に及ぶ。初めに男君の例を見ることとする。なお、命令・勧

誘表現の文に続けて、①型、②型等の型と敬度を括弧に包んで示す。

先ず、男君が話し手（命令者）の場合を見る。次は中将（男君）たちと中納言の北の方たちとの、清水詣の際の車争いの場面である。

- (1) 中将（男君）の、人を呼びて、「たが車ぞ」ととはすれば、「中納言殿の北の方しのびてまうで給へるに」と言ふに中将、うれしくまうであひにけり、と下にをかくおぼえて、「をのことも、『さきなる車とく遣れ』①型、C』と言へ、①型、C」。さるまじうはかたはらに引き遣らせよ①型、C」とのたまへば、御前の人々、「牛よわけに侍らば、えさきにのほり侍らじ。かたはらに引き遣りてこの御車を過ぐせ①型、C」と言へば、中将、「牛よわくは面白の駒にかけ給へ①型、B」とのたまふ声、いとあいぎやうづきてよしあり。車にはの聞きて、「あなわびし。たれならん」とわびまどふ。（巻二、一四六頁）

ここには五例の命令・勧誘表現が見られるが、中将の、中納言の北の方に対する「牛よわくは面白の駒にかけ給へ」を問題にする。ここは「……給へ」とあって敬度Bの表現になっているが、「面白の駒」とあだ名される、北の方の四の君の婿、兵部少に引つ掛けた言葉であり、これは辛辣、痛烈な揶揄の詞である。従って、それを聞いた北の方は「あなわびし。たれならん」とわびまどうのである。皮肉、からかいに用いられた尊敬語の例として注意しておきたい。

次は右に続いて、寺に着いた後の局争いの場面である。中将たちは先手を打って、中納言が予約していた局を占

領してしまふ。

(2) 中将、帯刀を呼びて、「かの人々わらはせよ(①型、C)」とき、めき給ふをも(中納言方は)知らで、わがつぼねと頼みて、来て入らんとするに、(中将の供人)「あらはなり。中将殿おはします」と言ふに、あきて立てれば、人々わらふ。

「いとあやしや。たしかに案内せさせてこそ下りさせ給はましか。かくうはのそらに御つぼねあるまじかめる物を。いといとほしきわざかな。仁王堂の行ひをせさせ給へ(①型、A)。それぞ所は広かなる」とそら知らずして、帯刀は我と知られんはいとほしくて、若うはやれるものをはやして言はせわらふに、はしたなき事かぎりなし。泣くにもはしたにわびしと言ふはおろかなり。〈中略〉

大徳呼びて、「かうかうして取られぬ。いみじき恥にこそあれ。又つぼねありぬべしや」と言へば、大徳、「さらにいまはいづこのかあらん。入りたるをだに殿ばらのきみたちはおしるさせ給ふに、遅く下りさせ給へるがましてあしきなり。いかゞせん。御車ながら明かさせ給ふべきなり(①型、A)。よろしき人ならばこそもしやと言ひ侍らめ。たゞいまの一のものにて、太政大臣も此のきみにあへば、おともせぬ君ぞや。……」など言ひていぬれば、かひなし。(巻二、一五〇―一五二頁)

ここには男君の例を含め、三例の命令・勧誘表現が見られる。

先ず、中将の、帯刀に対する「かの人々わらはせよ」がある。中将から帯刀に対する命令・勧誘表現は物語中部で二〇例あるが、特別な一例を除き、すべて敬度Cである。これは両者の関係から見て当然であろう。

関連して、文中の他の二例についても触れておく。第二は男君の供人から北の方に対するもので、敬度A。「い

といとほしきわざかな」などと言っているが、「……せーさーせー給へ」と最高度の敬語をもって逆に相手を嘲弄しているのである。先の皮肉、からかいに用いられた尊敬語の例とともに、敬語の機能の面で、見逃せない例である。

第三は「明かさせ給ふべきなり」であるが、この「……(せ給ふ)べきなり」は『落窪物語』で唯一の用例である。既に述べたように、この形式は「べし」とともに中古の仮名文学作品(和文)では、ほとんど用いられないものである。一例ある「……べし」(巻四、二四六頁。越前守↓男君)とともに話し手は男性であり、特にここは相手が北の方であるが、大徳らしい堅い言葉遣をしている。

次に右に特別な例としたものを挙げる。

- (3) 女君、人なきをりにて、琴いとをかしうなつかしう弾き臥し給へり。帯刀、をかしと聞きて「かゝるわざし給ひけるは」と言へば、「さかし。故上の、六歳におはせし時より教へたてまつり給へるぞ」と言ふほどに、少将、いとしのびておはしにけり。人(従者)を入れ給ひて、「聞こゆべきことありてなむ。立ちいで給へ」(①型、B)「と言はすれば、帯刀心得ておはしにけると思ひて、心あわた、しくて、「たゞいま対面す」といでていぬれば、あこきおまへにまゐりぬ。(男君↓帯刀。巻一、二二頁)

この男君の言葉について底本の脚注には「少将の詞。申し上げるべきことがあって(伺いました)。ちょっと出てください。従者に言わせる伝言。あこきに気取られないように、朋輩が所用で帯刀を訪ねてきた風を装う会話文」と説く。ここで男君は帯刀に対して敬度Bの表現をしているが、これは右に言うように身分を隠すための敬語であつて、特別な例である。これも敬語の機能の面で注意すべき例である。

男君が敬度Aの待遇をする相手は、父、母、女君の父中納言（四例中一例B）の他、次の帥（四の君の夫）に対する一例だけである。

(4) 帥（四の君の夫）は左の大い殿（男君）にまかり申にまゐり給へり。おとゞ対面し給ひて物語し給ふ。「よそにても心ざし侍りしを、いまはましてなん。そのちひさき人（四の君の娘）のくだり侍らんを、らうたくせさせ給へ（①型、A）。故祖父殿のいみじうかなしうしたまひしかば、こゝにてもおほし立てんものし侍れど、かの母北の方一人持たるを、責めて心苦しがりて添へらるゝなめれば、えとゞめでなん」とのたまへば、帥「堪へん心のかぎりは仕うまつらん」と言ふ。（巻四、二八三頁）

右は、まかり申しに訪れた帥に対する男君の言葉である。帥に対する命令・勧誘表現はこの一例だけである。

次は男君から女君に対する例をみる。中納言は女君の亡き母のもっていた三条邸を修復した。その話を聞いた男君は、中納言が転居する前に三条邸に移転し、邸を占有しようとする。

(5) (男君) 女君に申し給ふ。「人のいとよき所得させたるを、この一九日に渡らん（②型、C）。人々の装束し給へ（①型、B）。こゝも修理せさせん。とく渡りなん（②型、C）。いそぎ給へ（①型、B）」とて、くれなるきぬ、あかね、染め草どもいだし給へれば、ひとへにかく構へ給ふ事も知り給はで、いそがせ給ふ。（巻三、一八五頁）

この四例は②型、Cの二例と①型、Bの二例とに分かれる。②型の二例は自らを含む勧誘であるから、無敬語（敬度C）なのである。各二例のB、Cの対比が鮮やかである。

男君から女君に対する例は全部で三三例あるが、もう一例敬度Cのものがある。

(6) 中将の君、うちよりいと酔ひまかで給へり。いと赤らかにきよげにおはして、「御遊びに召されてこれかれにしひられつる、いとこそ苦しかりつれ。笛仕うまつりて、御ぞかづけ事侍り」とて持ておはしたり。(中略)

「いと苦し。臥したらん(②型、C)」とて御丁のうちに二所ながら入り給ひぬ。(巻二、一五九頁)

「大変疲れた。横になっていよう」と女君を誘ったものであるが、この「……たらん」(完了の助動詞「たり」推量の助動詞「む」)の形式による命令・勧誘表現は極めて珍しい例であって、『落窪物語』に僅かにこの一例、他の作品にはまず見られぬものである。

男君から女君に対するもので、②型の係結の例が一例ある。

(7) 大将殿「いまは、いざ給へ。部屋にもぞこむる」とのたまへば、「けしからず。いまはかけてもかゝる事なの給ひそ。忘れざりけりと聞きたまはば、思ひつゝ、む事いで来なんかし。……」とのたまへば、「さらなる事。

(北の方の)女君たちにも君こそは問ひ給はめ(②型、B)」とのたまふ。(巻四、二四五頁)

男君が、継母北の方が、あなたを物置に込めるかも知れないと、きつい冗談を言つて、逆に女君に、とんでもないと、強くたしなめられている場面。女君の言葉としては珍しく厳しい調子である。叱られた格好の男君は「さらなる事(勿論です)。……君こそは……」と、なだめているような言葉遣である。心理的な引け目がこの言葉遣に表れているように思う。

同じく、男君から女君に対するもので、③型の例が一例ある。

(8) (女君が)子子しければらうたしと思ひて「こゝ、(落窪の間)はいみじう、まわりくるも人げなき心ちするを、

渡したてまつらん所におはしなんや(③型、B)とのたまへば、「御心にこそは」との給へば「さらばよ」などの給ひて臥し給へり。(巻一、六五頁)

『落窪物語』の命令・勧誘表現は、ストレートなものが多く、前述のように③型は全体でも二例しか見られないが、これはその内の一例である。「おはしーなーんーや」と優しく勧誘しているところである。女君に対して、まだいづらか距離をおき、遠慮がちな言葉遣なのであろうと思われる。

続いて、男君が聞き手(受命者)の場合を検討する。

次は劇しい雨の中を、女のもとに忍んで行く男君(少将)と帯刀が衛門督一行にとがめられた場面である。

(9) つつやみにて、わらふわらふ道のあしきをよろほひおはする程に、さきおひてあまた火ともさせて、小路ぎりに、つじにさしあひぬ。いとせばき小路なれば、え歩み隠れず。片そばみて傘を垂れかけて行けば、ざふしきども、「このまかるものども、しばしまかり止まれ(①型、D)。かばかり雨もよに夜中にたゞふたり行くはけしきあり。とらへよ」と言へば、わびしくて、しばし歩み止まりて立てれば、火をうち振りて、「人々、足どもいと白し。盗人にはあらぬなめり」と言へば、「まうとの小盗人は足白くこそ侍らめ」と、行き過ぐるまに、「かく立てるはなぞ。ゐ侍れ」(①型、D)とて、傘をほうほうと打てば、くそそのいと多かる上に「かゝまりぬ。(巻一、四五―四六頁)

「このまかるものども」(雑色ども↓男君・帯刀)について『新日本古典文学大系』の脚注に次のように説明する。「行く」の謙讓表現。これを相手に使うと尊大な表現になる。どうやらないまつの一行は、前面を追うことと

言い、雑色の尊大な言い方と言い、長官クラスのそれらしい。

次の「ゐ侍れ」（雑色ども↓男君・帯刀）については、「ひかえおれ。他人に対して用いた『侍り』の命令形は尊大表現になる」（柿本奨著『落窪物語注釈』）と説かれる。このように「まかり止まれ」「ゐ侍れ」ともに尊大表現であり、裏返せば、軽卑語ふうな用法である。^{*17}これは主人の権力を背景に、嵩にかかった雑色の態度の表れであると同時に、相手（聞き手）が何者であるか、その正体が不明なことによる表現である。これが敬度Dの二例である。ここは「まかるものども」と少将たち二人をひと絡げにした言い方であり、先の第6表では男君と帯刀との両方に入れてある。なお、この場面では、「つじにさしあひぬ」以下の地の文で、少将に対する敬語（尊敬語）が消え、常体表現になっていることにも注意すべきであろう。

次は男君に対する敬度Cの例をみる。男君に対して敬度Cの物言いをしているのは、その父母のみである。父からは四例あるが、そのうち三例まで敬度Cである。なお四例いずれも①型である。

- (10) 父おとゞ、「わが兵衛佐、おそくなし給ふ」とのたまへば、「いとわりなきこと。おのれが子のかぎりをことのはじめにはいかゞはし侍らん」と申したまへば、「これは御子か。翁の五郎に侍れば、何かは人のそしりにならむ。さきには御太郎、左近の官にはなりにしかば、こたみは右近衛の少将をなせ（①型、C）。をぢにてをひになり劣るやうやはある」との給ひて、（巻四、二八九頁）

右の「兵衛佐」とは父おとどが引き取っている二郎君のことで、その官位の昇進を要求しているところである。

①型、Cで直接的な命令表現である。

母からは五例であるが、そのうち一例が次の敬度Cのものである。

(11) 殿の北の方「さかさまにも言ふなるかな。しひてたゞ言ふ事を聞きてよかし(①型、C)。人のためにはしたなきやうなり。いままでひとりある、見苦し」との給へば、少将「さ思はば早う取りてよかし(①型、C)。文はいまは、とて遣らん。いまやうはことに文通はしせでもしつなり」とて笑みて立ち給ひぬ。(巻二、一二二頁)

ここは男君の、四の君との縁談を巡つてのものである。母の言は「聞きてよーかし」、少将の、縁談を持つてきた人に対する言葉も「取りてよーかし」の形で、ともに完了の助動詞「つ」の命令形によるものであり、相手に対する働き掛け、説得または依頼の気持ちの強いものである。ただし二例とも文末の助詞「かし」によつて調子を柔らげている。「かし」は優しく、相手に説き聞かすような調子の語であろう。命令形で言い放つては強すぎる場合、むしろそれを柔らげ効果をもつものである。この点については後の「かし」の項でまた述べる。

次にあこきから男君に対するものを取り上げる。これは三例あり、二例が①型、A、残る一例が①型、Bである。敬度Bの例を見る。

(12) 御門にしばし立ちて、帯刀隠れより入りて、「御車あり。いづくにか寄せむ」と言へば、(あこき)「たゞこの北おもてに寄せよ(①型、C)」と言へば、引き入れて寄する、からうしてこのおのこ一人いで来て、「なぞの車ぞ。みないで給ひぬる所には」とがむれば、(帯刀)「あらず。御たちのまゐり給ふぞ」と言ひて、たゞ寄せに寄す。御たちの止まりたりけるもみな下に下りて、人もなき程なり。あこき「早うおり給へ(①型、B)」

と言へば、少将下り走り給ふ。(巻二、一一六頁)

ここは少将たちが、中納言邸から女君を救出する場面である。祭り見物に出掛けて邸には人が少ないが、それでもやはり「なぞの車ぞ。……」ととがめられるなど、緊迫した状況であり、「少将下り走り給ふ」もその場の緊迫を伝えて余りあるところである。帯刀、あこきの会話の短簡、簡潔なもの、この場の雰囲気によろう。問題の、男君に対する「早うおり給へ」という①型、敬度Bの表現も、この場の切迫した空気を伝えるものであろう。火急、緊急の時、急いで強く命令する時など敬意の低い表現になることがあるが、ここもその例であろうと思う。あこきから男君に対する他の二例と異なつて、ここだけが敬度Bである理由は以上のように考えられる。

帯刀に対する例にも触れておく。ここは「寄せよ」とあつて、敬度Cの表現である。前述した二例中の一例である。

次は前掲例文(9)の少し後の部分である。ここには男君と帯刀の会話がある。

- (13) 「衛門督のおはするなめり。我を嫌疑のものと(ママ)や、とらふると思ひつるにこそ死にたりつれ。我、足白き盗人とつれたりつるこそをかしかりつれ」など、たゞふたり語らひてわらひ給ふ。「あはれ、これより帰りなん」(②型、C)。くそつきにたり。いと臭くて、行きたらば中々疎まれなん」とのたまへば、帯刀わらふわらふ「か、る雨にかくておはしましたらば、御心ざしをおほさん人は麝香の香にもかぎなしたてまつり給ひてん。殿はいととほくなり侍りぬ。行ききはいと近し。なほおはしましなん」(②型、A)と言へば、かばかり心ざし深きさまにておりたちて、いたづらにやなさんとおほしておはしぬ。(巻一、四七頁)

男君と帯刀は互いに②型をもって表現している。帯刀の言は「おはしましーなーん」と勸奨しているが、完了の

助動詞があるだけ、強い表現である。更に「殿はいととほくなり侍りぬ。行ききはいと近し」。だから「なほ」と理由を挙げて強く勧めているところである。ただし、ここは「おはしましーね」(①型)ではないことに注意すべきであつて、ここ「……なーん」は飽くまで勧奨なのである。

男君の言にも触れておく。「帰りーなーん」(②型)は帯刀に向かつて帰ろうと言つたもので、勧誘である相手が帯刀であり、自らを含めたものであるから、無敬語(敬度C)なのである。

次は、女君の場合についてみる。女君からの命令・勧誘表現は二九例である。このうち敬度Aのものは、父おとゞに対する二例のみである。

- (14) 大将殿の北の方(女君) 是を聞き給ひて、(継母北の方を) いとほしくあはれにおぼして、「北の方の聞こえ給ふ事いとことわりなり。こゝにはたゞ何もかもなたびそ。君たちにあまねくたてまつらせ給へ」(①型、A)。
まして、こゝにたれもたれも住みつき給へるに、思はぬ方に侍らん、いと見苦し。猶早たてまつらせ給へ」(①型、A)と責め申し給へば、おとゞ、「おのれはえ取らすまじ。おのれ死に侍らん時、ともかくも心とし給へ」とてさらに聞きたまはず。(巻四、二四一頁)

重病の父大納言は邸を初め、遺産のうち、めぼしいものをほとんど女君に譲ろうとする。継母北の方は甚だ不満である。ここはそれを聞いた女君が、父に遺言の変更を迫っているところである。ここに見られる女君の姿は、物語前半の、単に気立ての優しい、柔順な、頼りない娘のそれではない。大将殿の北の方としての貫祿を備え、しっかりとした自らの意志を披瀝する成長した女性がある。ここは父大納言に対して、事を分けて「『たてまつらせ給へ』

と責め申し」ているのである。因みに、右のようなへ「命令形」と責むの例は他に三例ある。継母北の方から夫と四の君とに対する各一例、及び男君から女君に対する一例（後述）であるが、「責む」によって、いずれも強い要求になっていることは言うまでもない。

続いて女君から継母北の方に対する例をみよう。

- (15) 左の大きい殿、（北の方が、帥邸へ）渡り給ふと聞きて、御ぞなどはあざやかにあらし、とおぼし寄りて、いとよきにしておきたる御ぞ一具、又姫君の御料なる一くだり、「ちひさき人に着せたてまつり給へ（①型、B）。旅にはあらはなることもあるものぞ」とてたてまつり給ふ。北の方のよろこぶ事さすがかぎりなし。（巻四、二七六頁）

右は女君が、北の方の権帥邸訪問に援助する場面である。ここは左大臣の名で女君がお召し物を贈り、言葉を添えたものと解した柿本奨『落窪物語注釈』（七四〇頁）の解に従う。

- (16) 帥は任果てて、いとたひらかに四の君の来たるを、北の方うれしとおぼしたり。ことわりぞかし。かく栄え給ふをよく見よとや神仏もおぼしけん、とみにも死なで七十余までなんいましける。大い殿の北の方「いといたく老いたまふめり。功德を思ほせ（①型、B）」との給ひて、尼にいとめでたくてなし給へりけるを、よろこびのたびいますがりける。（巻四、二九〇頁）

右は物語の終末近く、継母北の方に来世のための善行を勧め、立派な作法で尼にした部分である。

女君が聞き手の場合については、既に数例挙げたので、ここでは父中納言からの一例に止める。

(17) うへのきぬ裁ちておこせたり。又おそくもぞ縫ふと(北の方)おぼして、よろづの事おとゞに聞こえて、「行きての給へ、の給へ」(①型、B。繰り返し)と責められて、(中納言)おはして、遣り戸を引きあげ給ふよりの給ふやう、「いなや、このおちくほの君の、あなたにの給ふ事に従はず、あしかんなるはなぞ。親なかんめれば、いかでよろしく思はれにしがなとこそ思はめ(②型、C)。かばかりいそぐにほかの物を縫ひて、このものに手触れざらんや何の心ぞ」とて、「夜のうちに縫ひいださずは子とも見えじ」とのたまへば、女、いらへもせで、つぶつぶと泣きぬ。おとゞ、さ言ひかけて帰り給ひぬ。(巻一、七〇頁)

右の「こそ……め」の「め」の意味は一般に〈勸奨〉とされるものであるが、ここでは強い叱責の口調で表現されている。従って「思うがよい」ではなくして「思ハナクテハナラヌ」(『落窪物語大成』傍注)「心がけなければいかん」(『日本古典文学全集』口語訳)といったところが適訳であろう。北の方の讒を真に受けた老中納言は立腹しているのであるが、叱責口調での「こそ……(常体)ーめ」の例は珍しい。

なお、ここには北の方の、夫中納言に対する命令・勧誘表現がある。「行きての給への給へ」とあり、命令形を繰り返したものである。繰り返すことによって急迫、相手に強く要求する調子である。しかもここは更に「『……』と責める」のであり、前述のように一層厳しい物言いとなっている。なお、このような繰り返しは用例数、一と数える。

次は北の方の例をみる。

(18) この券をこの越前守の取りて立ちければ、北の方、返したてまつるにやあらんといとあやしくて、「それはなどもて行く。さのたまひつらん物を。持て来、持て来(①型、C、繰り返し)」と呼び返しければ、あな物

ぐるほし、大事のものをおろかにも言ふかな、とさわぎけり。(巻四、二五二頁)

家の券を巡つての北の方の言葉である。「持て来、持て来」と、これも命令・勧誘表現の繰り返しであり、いかにも急迫した調子である。『落窪物語』の命令・勧誘表現の繰り返しは、先の北の方の例と、この例との二例しかないのである。北の方の激情的な性格の現れであろう。

(19) 暗うなりぬれば、格子下ろさせて、灯台に火ともさせて、いかで縫ひいでんと思ふ程に、北の方、縫ふやと見にみそかにいましにけり。見たまへば、縫ひものはうち散らして、火はともして人もなし。入り臥しにけりと思ふに、大きに腹立ちて、「おとゞこそ。このおちくほの君、心のあいぎやうなく、見わづらひぬれ。これいましてのたまへ(①型、B)。かくばかりいそぐものを。いづこなりし木丁にかあらん、持ち知らぬもの設けて、つい立てて、入り臥し入り臥しすることよ」とのたまへば、おとゞは「近くおはしての給へ(①型、B)」とのたまへば、いらへとほくなりぬ。(巻一、六九頁)

ここは例文(17)の直前の部分である。おちくほの君の部屋を覗いて、大いに立腹した北の方は、思わず「おとのさまあ」と遠くにある夫に叫ぶ。続いておちくほの君の非をならし、ここに来て叱責してくださいという。大声である。北の方の、激情的な、同時につつしみのない、粗野な性格を示すものである。中納言は寢殿にあって、こちらで、と応えている。これも大声であろう。北の方の立腹、叫びによる喧騒、この雰囲気は他にはあまり例のないものであろうと思う。

(20) (四の君) やおらものするやうにて起きて出でたるを、北の方待ち受けて、の給ふことかぎりなし。「おいらかにはじめよりかうかうしたりと言はましかば、しのびてもあらましを、所あらはしをさへして、かくの、

しりて、我も人もゆゝしき恥を見る事。たがなかうどしてしはじめしぞ」と、「言へ(①型、C)」と責むれば、四の君、あさましういみじうなりて、たゞ泣きに泣く。(巻二、一三九頁)

右は、四の君と結婚した相手が、面白の駒だとわかった後の、中納言邸の狼狽、嘆きを描く一部分である。

「『言へ』と責むれば」とあつて、ここでは四の君に対して無敬語(敬度C)である。また命令・勧誘表現ではないが「たがなかうどしてしはじめしぞ」なども無敬語の厳しい言葉である。北の方からの四の君に対する命令・勧誘表現は全部で九例あるが、他の八例はみな敬度Bである。ここは立腹し、責めているために無敬語になったものであろう。

あこきが話し手の例は二八例である。そのうち典葉助に関わる場面での例を順にみようと思う。

(21) あこき、典葉や入りぬらんとまどひ来て見るに、遣り戸細めにあきたり。むねつぶる、ものから、うれしくて引きあけて入りたれば、典葉かゞまりをり。(中略)「御焼き石当てさせ給はんとや」と聞こゆれば、「よかなり」とのたまへば、あこき、典葉に、「ぬしをこそいまは頼みきこえぬ。御焼き石求めてたてまつりたまへ(①型、B)。みな人も寝しづまりて、あこきが言はんにはよも取らせじ。これにてこそ心ざしありなし見えはじめ給はめ」と言へば、典葉うちわらひて、「さなゝり。残りの齢少なくとも、一筋に頼み給はゞ仕うまつらん。……思ひにさし焼きてん」と言へば、「同じくはとく」と責められて……石求めんとて立ちぬ。(巻二、一〇四頁)

典葉助が、夜、おちくぼの君の部屋に入ってくるが、あこきの焼き石という機転で、一旦は急を逃れる。こここの

あこきの言説は巧みに相手の心理の機微を突いている。おだてられた典薬助は直ちに「さな、り。……思ひにさし焼きてん」と承知するが、あこきは更に、同じことなら早く、とせきたてる。こうして典薬助は部屋を出て行った。ほっとしたか、気丈なあこきもさすがに嘆くが、次は、それに続く場面である。

(22) (おちくぼの君) 「さらになん物もおぼえぬ。いま、で死なぬ事の心うき」と、「心ちはいとあし。この翁の近づき来るにいとわびしき。その遣り戸かけこめてな入れそ」とのたまへば、「さて、腹立ちなん。なほなごめさせおはしませ(①型、A)。頼む方のあらばこそこよひはたてこめて、あすはその人に言はんとも思ひ侍らめ。少将の君嘆きわび給へども、いかでたゞいま。辺りにだにおぼし寄らんことかたくなん。御心の中にも仏神を念ぜさせ給へ(①型、A)」と言へば、君、げに頼む方なく、……たれも泣くほどに、翁、焼き石包みて持て来るを、わびて手づから取る心ち、おそろしうわびしくおぼゆる。

姫君は、遣り戸を閉めて典薬助を入れるなど言う。しかし、あこきは言う。そんな事したら、典薬助がきつと立腹しよう。やはり典薬助の気持ちを落ち着かせていらっしやいませ、と。『大成』はここを「腹立たせずしてすかし和らげよと也」と説く。^{*18} あこきは事態を冷静に把握して、適切な指示を与えている。更に、今晚はとにかくどうにもなりませんから、「御心の中にも仏神を念ぜさせ給へ」と勧め、仏神の加護を求める。続いて

(23) 翁、装束解きて臥していただき寄すれば、「あが君、かくなし給ひそ。いみじくいたきほどは起きて押へたるほどなんすこしやすまる心ちする。のちをおぼさば、こよひはたゞに臥し給へれ(①型、B)」と言ふ。いとわびしくしていたう病む。あこき、「こよひばかりにてこそあれ。御忌日なれば、なほたゞ臥し給へれ(①型、B)」と言へば、さもある事とや思ひけん、「さらば、これに寄りか、り給へ(①型、B)」とてまへに寄り臥せば、

わびし。押しかゝりて泣きあたり。……（典葉助は）ほどなく寝入りてくつ臥せり。（中略）

明けぬればいとうれしとたれもたれも思ふ。翁を突きおどろかして、（あこき）「いと明かくなりぬ。いで給ひね（①型、B）。しばしは人に知らせじ。長く思ひ給はば、のたまはん事に従ひ給へ（①型、B）」と言へば、「さかし。我もさ思ふ」とて、ねぶたかりければ、目くそ閉ぢあひたる払ひあけて、腰はうちかゝまりて出でぬ。

「こよひはたゞ臥し給へれ」と言う姫君の言葉に続けて、あこきは更に、御忌日だから、「なほたゞ臥し給へれ」と典葉助を説得する。典葉助もそれ以上、積極的な行動には出なかつた。翌朝、あこきは寝込んでゐる典葉助をつき起こし、すっかり明るくなったから、きつぱりお出になつて下さい（「いで給ひね」と言う。また「長く思ひ給」うのならば、「のたまはん事に従ひ給へ」とも。あこきの、この理詰めという言葉に典葉助はただ、唯々として行つた。

こうして、あこきはついに姫君をまもりぬく。この危機を逃れることが出来たのはなんととっても、あこきの働きに負うところが大きいと言うべきであらう。以上、この場の、あこきから典葉助に対する命令・勧誘表現は四例、すべて①型、敬度B、姫君に対しては二例、ともに①型、敬度Aである。

五の2

以上、主要人物のうち男君、女君、母北の方、あこきの例について考察してきた。次に助動詞、助詞のうち注意すべきものについてみることにする。

先ず、完了の助動詞の例を挙げる。「ぬ」の命令形「ね」から。これは次の四例である。

(24) 早うさぶらひにまれおはしね。(あこき↓帯刀。敬度B。卷一、二四頁)

(25) おほとのごもりね。(あこき↓おちくぼの君。敬度B。卷二、一一二頁)

(26) あこきおとなになりね。(男君↓あこき。敬度C。卷二、一二二頁)

(27) 君の人になりね。(女君↓衛門へあこき)。敬度C。卷二、一八二頁)

「給ひね」は一一例あるが、その一部を挙げる。

(28) 「夜いたうふけぬ。多し。寝たまひね」と責むれば、「いますこしなめり。早う寝給ひね。縫ひ果てらんよ」と言へば(男君↓女君。敬度B。女君↓男君。敬度B。卷一、七九頁)

これは男君、女君が互いに同じ言葉遣をしており、「給ひね」の表現価値を考える上で注意すべきものである。女君から男君に対する「給ひね」がもう一例ある。

(29) 少将、「かの北の方にいかでねたきめ見せん、と思へばなり」との給へば、女「これは早、忘れ給ひね。か

の君(四の君)やにくかりし」との給へば(女君↓男君。敬度B。卷二、一二四頁)

これは「きつぱりと忘れてしまつて下さい」という強い依頼である。「忘れ給へ」と比較して「ね」の表現価値が確認出来る。なお、助動詞「つ」「ぬ」の、この強調、確述の用法について既に詳述しているので、それを参照して戴きたい。^{*19}

(30) 「いでや。よしよし。立ち給ひね。いと言ふかひなくねたし。異人にこそ預くべかりけれ」とのたまふ。(北の方↓典葉助。敬度B。卷二、一一九頁)

これは、おちくぼの女君の件が不首尾に終り、典薬助の言い訳を聞いた北の方が立腹している所である。北の方の典薬助に対する命令・勧誘表現は全部で六例あるが、常に敬度Bの待遇をしている。ここもそれで、おぢの、助に対して、いかに立腹しても、さすがに「立ちね」（敬度C。「立ち去ってしまへ」）ではない。ただし一方「立ち給へ」ではなく、「立ち給ひーね」であるから、「ね」に込められた感情、その表現価値に注意して現代語訳すれば、「と、と、と、とお立ち去り下さい」とでもなるうか。ここは特に激しい心情と、強い要求の感じられる表現である。なお、右に非常によく似た場面が『今昔物語集』にあるので参照して戴きたい。^{*20}

次に「てよ」の例をみる。既に男君の話し手、聞き手の場面で「聞きてよ、かし」「取りてよ、かし」の二例を挙げがあるので残る四例をみる。

(31) (女、見て) えんずれば、帯刀うちわらひて「知らず。まろはかやうに見苦しげにはしてんや。女どものみさかしらなめり。つゆ、これ取り隠してよ」と遣りつ。(帯刀↓つゆ。敬度C。卷一、二〇頁)

「つゆ」というのは、あこきの召使である。「す、す、す、取り片づけてしまえ。」

(32) 「いとよかなり。たゞいまおひもて行きて、この北の部屋にこめてよ。ものなくれそ。しをり殺してよ」と、老いほけて、もののおほえぬまゝにのたまへば(中納言↓北の方。敬度C。卷一、八四頁)

北の方の讒を真に受けた夫の中納言の言。中納言から北の方に対する例は全部で一一例見られるが、うち七例は敬度B、四例が敬度Cである。ここは禁止の文も含めてすべて敬度Cである。無敬語であるだけに一層きつい言い方になっている。「こめてよ」を、「てよ」の表現価値に留意し、前例と同様、やや誇張して現代語訳すれば「た

しか、閉じ込めてしまえ」となるうか。次ぎに「しをり殺してよ」は『大成』に「責メ殺シテヤレ」と傍注するが、同様にして「きつく折檻して殺してしまえ」となるう。老中納言の事の道理もわからぬ——もののおぼえぬ——ままの言であるが、「こめよ」、「しをり殺せ」に比べ、感情をこめた、強い物言いである。

(33) (衛門) 「たゞ、かくてさぶらふにおぼしてよ。その夜にはおちくぼの御方と聞こえしよ。……」と言へば、少納言……よろこびながらおまへにまゐりたり。(衛門↓少納言。敬度B。卷二、一五六頁)

衛門というのとはあこきのこと、少納言というのとは中納言邸の侍女である。「てよ」の敬度Bのものはこの一例だけで、他の五例はみな敬度Cのものである。

因みに『落窪物語』には「給ひてよ」の例はない。

完了の助動詞の用例中、注意すべきは「給へれ」の八例である。完了の助動詞「り」の消長については既に多くの論があるが、その命令形の例はきわめて限られているとされる。筆者の調査によっても、「……れ」即ち「給ふ」に下接せぬ「り」単独の命令形の例はこれまでのところ見られない。先の一覧表(第2表)にこの項を設けていない所以である。更に「給へれ」の例も限られており、中古の和文では他に『宇津保物語』の八例、『栄花物語』の三例、『古本説話集』の一例を見るに過ぎない。作品の量からいっても『落窪物語』のこの八例は特に目立つものである。若干の例を挙げておく。

- (34) 「をかしきさまならんくだもの一餌袋して置き給へれ。……」(帯刀↓母親。敬度B。卷一、一八頁)
- (35) 「いで、あな見苦し。なかなか入れて持たせ給へれ。……」(あこき↓女君。敬度A。卷一、五九頁)

(36) 「しばし入りて臥し給へれ」 (男君↓女君。敬度B。巻一、七二頁)

右の「臥し給へれ」の例は他に二例見られる。なお、話し手は右以外に、女君、三郎景政、母北の方であつて、特に偏りは見られない。

文末に助詞「かし」を伴う例を挙げる。

(37) 少納言、「……よきこともあらばせさせ給へかし」と言へば (北の方の侍女少納言↓女君。敬度A。巻一、七四頁)

(38) をとこ君「……これに添へて返し給へかし。……」とのたまへば (男君↓女君。敬度B。巻三、一九八頁)

(39) 「……よき事知り、ものの心知りたらん人おしはかりて申せかし」と言へば (母北の方↓越前守。敬度C。

巻四、二五〇頁)

「かし」は、一般に、強く念を押すものと説明されてきたが、前述のように、命令・勧誘表現においては、普通に言われるよりは、もっと優しい、相手に説き聞かすような調子の語であろうと思う。命令形で言放つては強すぎる場合、むしろそれを柔らげる効果をもつものである。命令形に下接する「かし」の例は『落窪物語』に一一例あるが、先の例文(11)の例を含め異性間の用例が七例で、そのことも「かし」の表現価値を考えさせるであろう。^{*22}

次は先に挙げた例文1に直接する部分である。

(40) なほさきに立ちて遣れば、中将殿の人々、「え引き遣らぬ、なぞ」とてたぶてを投ぐれば、中納言の人々腹

立ちて、「ここと言へば、大将殿ばらのやうに。中納言殿の御車ぞ。はやう打てかし」と言ふに、この御供のざふしきどもは、「中納言殿にもおづる人ぞあらん」とて、たぶてを雨の降るやうに車に投げかけて、かたやぶに集まりておし遣りつ。(中納言の供人↓中将〈男君〉の供人。敬度C。卷二、一四六頁)

ここの例は、こちらは中納言殿の御車だぞ。打てるものなら早く打ってみろよ、どうぞ、といった語気であろうか。「かし」の、相手に説き聞かすような調子は、このような場面では相手を挑発する機能を持つことになろう。右の現代語訳はその気持ちが判然とするように、誇張した、説明的なものである。

次は強調の例である。

- (41) 「入れに入れよかし。離れてはた住むなれば」との給ひて、帯刀、あこきに、かくなんと語れば(男君↓帯刀。敬度C。卷一、七頁)

「かし」の例でもあるが、これは「入れに入れよ」という形で、強調した例である。『大成』は「兎にも角にも、我を姫君の處に入れよとなり」とする。また、これは「高家の若君の濶達さの現れで、話相手が帯刀であるから一層遠慮が無い」(柿本『注釈』)物言いでもある。ただこういう例は極めて珍しいもので、『落窪物語』にもこの一例しか無い。中古の他の作品にもほとんど見られぬものである。^{*23}

最後に、③型の残る一例をみる。

- (42) 「我がいと思ふさまにおはすなるを、かならず御文伝へてんや(③型、C)」との給ひしかば(弁の少将↓

少納言。卷一、七五頁)

ここは弁の少将が女君の理想的な様子を聞いて、北の方の侍女少納言に仲介を頼んだ言葉である。尊敬語を要する相手ではないが、他家の侍女であり、「伝へてーんーや」と婉曲(③型)に依頼しているのである。③型は先に触れた例とこの例との二例である。

おわりに

以上、『落窪物語』の命令・勧誘表現を考察してきた。先ず前提として、「一」で「中古の仮名文学作品における命令・勧誘表現の四段型体系及び「敬度」「敬度値」「敬度指数」について略述し、その上にたつて、「二」「三」の全体的、数量的な考察から、「四」の主要人物の用例の数量的な考察へと進み、次いで「五」でその主要人物の用例の具体的な検討、更に注意すべき助動詞、助詞その他について見てきた。これによって『落窪物語』の命令・勧誘表現の主要な問題は、ほぼ明らかにし得たであろう。また、主要人物の用例の検討によって、同時に、命令・勧誘表現からみた『落窪物語』、即ち大衆小説としての本物語の一面をも確認したことになろうと思う。

例文中、特に注意すべきものを順に挙げれば、次のとおりである。

1 話し手の特殊な待遇の意図、換言すれば特殊な敬語の機能に関わるものがある。即ち

①丁寧な尊敬語によって、逆に相手を皮肉り、からかい(例文1)、②過重な二重敬語によって嘲哂し(例文2)、あるいは③身分を隠すための敬語の使用(例文3)等である。

2 中古の仮名文学作品(和文)にはごく少数しか用いられない「べきなり」が一例、大徳の言に見られる(例文2)。

- 3 「……たらん」（完了の助動詞「たり」―推量の助動詞「む」）の形式によって勧誘している極めて珍しい例がある（例文6）。
- 4 あこきから男君に対する敬度Bの言葉遣（例文12）は、火急、緊急の場面で、敬度の低い表現になったものであろう。
- 5 北の方の発言にのみ、繰り返しが二例見られる（例文17、18）が、これは北の方の激情的な性格の現われであらうと思う。
- 6 ②型の「こそ……め」のうち、叱責口調の稀な例がある（例文17）。
- 7 「給へれ」が多く見られる（例文34以下）。
- 8 命令・勧誘表現における「かし」（例文37以下）は、強く念を押すというよりも、優しく相手に説き聞かすような調子の語である。
- 9 「入れに入れよかし」（例文41）という珍しい強調表現がある。

注

*1 筑摩叢書 昭和三九年三月、初版第1刷。

*2 三谷邦明①「落窪物語の方法——その享受と表現をめぐって——」（『平安朝文学研究』第二卷第八号、昭和四四年一二月）
三谷邦明②『日本古典文学全集』『落窪物語』の解説（昭和四七年八月）

三谷は②において、①の見解を敷衍し、「阿漕と同じような身分、地位にある女房、つまり貴族社会の底辺を形成していた侍女階層の文学がこの『落窪物語』であったに相違ない。だからこそ、阿漕は巻一、巻二では女主人公落窪の君以上の活躍

をし、巻末で『内侍のすけ』となり二百歳までの長寿を保ったように書かれているのであろう」とする。

* 3 鈴木一雄 「源氏物語」の文章」（「解釈と鑑賞」昭和四五年六月）

* 4 山口仲美 『落窪物語の会話文——人物造形の方法——』（「国文」72号 お茶の水女子大学、平成二年一月。後、『平安朝の言葉と文体』に加筆補正して収める。）

* 5 拙稿 「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」（「国語国文」第四四卷第三号、一九七五年）、「命令・勧誘表現研究のために」（「比較文化論叢2」札幌大学文化学部、一九九八年）、『今昔物語集』における命令・勧誘表現の種々相」（「比較文化論叢3」一九九九年）

* 6 拙稿 「命令・勧誘表現研究のために」（「比較文化論叢2」一九九八年）

* 7 拙稿 「中古仮名文における命令・勧誘表現体系」（「国語国文」第四四卷第三号、一九七五年）

* 8 「『敬度』 『敬度値』 『敬度指数』——敬意の度合の客観的な把握のために」（「比較文化論叢」1。一九九八年）

* 9 注3の論文に示された両作品の総行数を基に算出した。

* 10 亀井 孝 『概説文語文法』一六五頁。吉川弘文館。

* 11 拙稿注8論文

* 12 拙稿注8論文

* 13 森野宗明著 『王朝貴族社会の女性と言語』（七二頁）に、「（あこきと帯刀は）女童と若侍クラスの身分的に似合いの夫婦である」という指摘がある。

* 14 ほとは十一月二十三日の程なり。三の君のをとこの蔵人少将、にはかに臨時の祭りの舞ひ人にさ、れ給ひければ、北方、手まどひをし給ふ。あこき、論なう御縫ひもの持て来なんものぞ、とむねつぶる、もしるく、うへのはかま裁ちて、「『これたゞいま縫はせ給へ。御縫ひものいで来なん』となん聞こえ給ふ」と言ふ。』』は私に補った）。

「」の部分の中納言の北の方の使いの、おちくぼの君に対する言葉である。『』の部分には北の方の言葉をおちくぼの君に伝えたものであるが、これは間接話法と解される。なぜなら、おちくぼの君に対する命令・勧誘表現は計五七例見られる（第6表）が、敬度Aの例は、あこきの四例及び北の方の侍女（少納言）の二例しかない（そして、北の方の侍女↓おちくぼの君の例はこの二例のみ）。また北の方の場合は敬度Bが六例、同Cが二例である。従って、北の方のここの例だけを敬度A

による待遇と解すべき理由はなく、間接話法とするのが穏当であろうと思う。

- * 15 拙稿注 8 論文
- * 16 三木雅博「『落窪物語』を読む」(『王朝物語を学ぶ人のために』一九九二年、所収)。
- * 17 佐伯梅友『国語概説 改訂版』(二五二頁。秀英出版)に、この「侍り」についての説明がある。
- * 18 日本図書センター版、一七八頁。
- * 19 拙稿「助動詞『つ』『ぬ』の確定的用法」(『王朝』第六冊、昭和四八年)
- * 20 『今昔物語集』卷一九「春宮藏人宗正出家語」第一〇。
- * 21 宮田和一郎「語法的にみた助動詞『り』の性格」(『国語国文』第二二卷第九号)他。
- * 22 拙稿「源氏物語の命令・勧誘表現」(『国語国文』一九七六)に『源氏物語』における「かし」の用法について述べた。ここでもその使用率は異性間の方が甚だ高いのである。
- * 23 類例は『栄花物語』卷一に「たゞ殺しに殺されよ」の一例がある。